

幸福 の 赤い サクランボ



中国旅行4日目、9月4日朝7時、黒竜江省南端の鏡泊郷を路線バスで出発した。

午前11時に牡丹江のバスターミナルに着くと、牡丹江師範大学で日本語教師をしている潘那さん(31)が、同じ大学で体育教師をしているご主人と一緒に私たちを出迎えてくれた。

潘那さんは4年前、私の通訳として、長春や瀋陽、大連などをめぐる旅行に10日間同行してくれた。今回の旅行でも潘那さんに通訳をお願いしたが、妊娠中だということと、黒竜江大学大学院の後

「バーリンホウ」 80后 夫婦 夢持つ世代

輩の谷租玲さんを紹介してくれたのだった。

中国では、一人っ子政策が進め



られた1980年代に生まれた新世代が、日本語で「後」の意味を示す「后」の言葉を使って「80后(バーリンホウ)」と呼ばれている。「バーリンホウ」である潘那さん夫婦は、地方在住の中間所得層の典型的なモデルだと私は思っている。

私のために予約してくれた料理店で、とても上品でおいしい昼食をごちそうになりながら話を聞いた。潘那さんのご主人は、「烏蘇里舟歌」で有名な饒河県の出身。そこで前年に結婚式を挙げた2人は「これからの中国は、経済事情がもっと良くなると思えるので、

牡丹江駅前飲食店街に立つ潘那さん(右)と筆者

多田耕太郎 1954年山辺町生まれ。金山町のスリッパ工場長を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、2・1畝のサクランボ園を経営する。

子育てや将来の生活設計に、たくさん夢を持っています」と楽しそうに話していた。

2人によると、「バーリンホウ」の世代の多くは、消費意欲が旺盛で、それまで受けてきた反日教育とは裏腹に、日本製品や日本文化に対しては信頼感と憧れを持っている、とのことだった。

「中国国内で生産された日系企業の製品があっても『made in Japan』と表示された商品があれば、少々高くとも、そちらを手にしたという心理がありますね」。2人からは、そんな話も聞かれた。